



愛の賛歌

「恋しい人の声が聞こえます。山を越え、丘を跳んでやって来ます。」

(雅歌2章8節)

いま聖書が朗読されている時、自分の若い頃が思い出されて切なくなつたという方もおられると思います。ただ、この年になって何を今さらということではありません。

雅歌はだいたいこういうストーリーになります。ソロモン王、シュラムの乙女、羊飼いの若者の3人が登場人物です。乙女は羊飼いの若者と相思相愛の仲でしたが、そこにソロモン王が現れて彼女を見初め、富と権勢をかさに結婚しようとしています。しかし彼女は若者に対する純潔を全うし、真実の愛を貫いて行くというものです。

乙女は歌います、「わたしはシャロンのばら、野のゆり」。ここでは、これはありふれたものでしかありません。つまり、「私はどこにでも咲いているありふれた花なのよ」ということです。これに対し、若者はいったんは同意します。たしかにあなたはゆりの花、でも「おとめたちの中にいるわたしの恋人は、茨の中に咲きでたゆりの花」、ほかの娘たちを全部合わせてもあなたの美しさにかなうものはないのだ、と言うのです。

すると、乙女の方でも若者に言葉を返します。「若者たちの中にいるわたしの恋しい人は、森の中に立つりんごの木」、森にいろんな木があっても、あなたはその中でも一番素晴らしい、花も実もあるりんごの木なのです、と。皆さんの中で、おつれあいとこのように言い交した方がおられるのではないのでしょうか。

「わたしはその木陰を慕って座り、甘い実を口にふくみました」、これが恋人と一緒にいる時の彼女の喜びです。「その人は、…わたしの上に愛の旗を掲げてくれました。」、愛の旗の反対が、ソロモン王が掲げている権力や財宝がらみの旗です。羊飼いの若者は、娘にぜいたくな暮らしを約束することは出来ません。しかし愛があるのです！

乙女と若者は何か理由があつて、毎日会う

2019年9月発行

ことが出来ません。しかし、会いたければ千里も一里です。「恋しい人の声が聞こえます。山を越え、丘を跳んでやって来ます」。…エルサレムは標高790メートルの台地にあつて、若者はここまでかけつけてきました。まるでかもしかか若い雄鹿のように。乙女はその声に気づいて、喜びに体をふるわせませす。

若者は格子窓から中をのぞき、乙女に立って出ておいでとさかんに呼びかけますが、彼女はすぐには出て来ませす。「わたしの鳩よ」、野生の鳩は岩の裂け目などに臆病そうにひそんでいるそうです。乙女は男性の誘いがあつたからといってすぐに応じることはせず、鳩のように恥ずかしがって隠れています。声をきかせておくれと言われて、彼女が最初に発した言葉が、ぶどう畑を荒らす狐たちをつかまえてくださいということでした。ぶどう畑を荒らす小狐とはおそらく彼女に言い寄ってくるほかの男性でしょう。私に目をつけているほかの男性がいるから、しっかり見張っていて、私をほかの男性に取られないようにして下さいと言うのです。本当に、そんな男性がいたのかどうか、ふざけてからかっているのかもしれない。

乙女にとって、ほかに言い寄ってくる男性がいたとしてもそれは小狐にすぎませす。「恋しいあの方はわたしのもの、わたしはあの人のももの」だからです。この言葉はその後、古今東西の愛の歴史の中で繰り返されてきたことと思います。自分のために異性を愛するのは、本当に愛することにはなりません。愛の押しつけは愛の本質を違えています。あの方は私のもの、私はあの人のもものというのは、互いの存在そのものを所有しあうということで、これこそ愛の本質を現わす言葉として、聖書に掲げられているのです。…こうして乙女と若者が愛を確認したところで、若者は帰って行きます。

神様が男女の愛を祝福して下さることを喜び、祝いましょう。そこから見えてくるものがきっとあるはずです。

(2019年6月26日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊